

# 日本語・日本事情科目「演習2」の授業における 効果的相互作用の模索

高橋 純子

## 要 旨

大学暦 2004 年度日本語・日本事情科目の登録制度に変更があった。それまでは短期留学生を含む学部留学生、および帰国生が受講可能であったものが、2004 年度は、日本語補講コースの学生も受講できるようになった。そして 2005 年度には、それ以前の制度にもどった。

演習 2 は、発表、討論、レポート作成など大学生として必要な基本技能を身につけることを目的とし、学生が主体的に学ぶよう授業設計をしてきた。この登録制度の変更により、2004 年度は年齢差、および成熟度の異なった学習者が一緒に学ぶこととなった。本稿は学習者同士の相互学習の効果を最大限に引き出すことを目指し、2004 年度 2、3 学期と、2005 年度 1 学期の 3 学期間における学生の学習成果、動気付け、学習への取り組みについて報告する。

【キーワード】学部留学生 帰国生 年齢差 成熟度 相互学習 動気付け

## The Effect of Interaction between Students of Different Backgrounds in Seminar 2

TAKAHASHI Junko

【Abstract】 Changes in the enrollment system in the 2004 academic year also had an effect on Seminar 2 of the Japanese Language and Affairs courses. Seminar 2 is aiming to develop the basic skills needed as an university student. Due to the new enrollment policies, Seminar 2 saw increased diversity in the classroom. Students from a variety of age-groups and academic levels participated in the course. The information presented here is based on observations of students' performance, motivation, attitudes and interaction in the classroom over the following three trimesters: the second and third trimester in 2004 and the first trimester in 2005. The aim of this report is to help students make the most of peer learning strategies.

【Keywords】 diversity, a variety of age-groups and academic levels, interaction, motivation

## 1. はじめに

日本語・日本事情科目の1つである「演習2」は、従来、学部の学生を中心に大学生活で必要なスキルの習得、1) あらたまった場での口頭表現能力の養成、2) 学生が主体となって資料を収集し、分析、結論を導き、3) レポート形式にまとめる を基本学習目標としてきた。本授業を受講できるのは、日本人帰国生、短期学部留学生といずれも学部の学生のみであった。2004年度は、留学生センターの補講コースに登録する学生にも門戸が広げられ、学部学生以外の外国人大学院生および研究生、教員研修生も受講できるように登録制度が変更された。2005年度には、またそれ以前の制度に戻った。つまり、外国人の大学院生、研究生、教員研修生は受講不可となったのである。

演習2の授業では、学生が主体的に活動することを基本に、学生間の相互学習を促すよう授業設計を行ってきた。2004年度の2、3学期と2005年度1学期の学習者の学習成果、動機付け、取り組む姿勢、学習者間の相互作用を観察した。演習2は、学期毎に様々な個性、能力の学習者が集まる授業であるが、2004年度2学期は、年齢差、知的成熟度の異なる学習者が集まり、帰国生1年生の学習成果が思わしくなかったことが観察された。以下、その詳細を報告する。

本稿では、学生の名を以下の用に使用している。

帰 国 生：帰国子女、秋学期に入学した学部生。

外国人学部学生：学部の正規登録学生

短期学部留学生：筑波大学以外にも学籍を有し、1年の短期間留学生として学部に登録している学生

教 員 研 修 生：既に大学教育を終了し、教職に就いており、1年半におよぶ研修のため来日した学生

尚、2004年度1学期についての記述がないのは、筆者の個人的都合によりその学期は演習2の授業を担当しなかったためである。

## 2. 各学期における学習者の内訳と学習目標及び活動内容

### 2.1 各学期の学習者の内訳

1) 2004年2学期：	帰国生1年	3名
	帰国生2年	1名
	中国人学部学生1年	1名
	中国人学部短期留学生	3名
	韓国人学部短期留学生	2名
	韓国人教員研修生	1名
	計	11名

2) 2004年3学期：	帰国生1年	9名
	帰国生2年	1名
	韓国人学部短期留学生	1名
	韓国人学部学生1年	1名
	台湾人学部学生1年	1名
	アメリカ人学部短期留学生	1名
	インド人学部短期留学生(日研生)	1名
	計	15名
3) 2005年1学期：	帰国生1年	1名
	帰国生2年	1名
	中国人学部学生1年	5名
	韓国人学部学生1年	3名
	マレーシア人学部学生1年	1名
	計	11名

## 2.2 3学期を通して共通する学習目標

- 1) ある事柄に関して情報収集をし
- 2) 分かりやすく要点をまとめ、説明ができるようになる。
- 3) 限られた時間内に視覚資料を効果的に使い、簡潔で聴衆にわかりやすい発表ができるようになる。
- 4) 自分の感想、意見を具体例をあげたり、比喩を使ったりして、分かりやすく伝えることができるようになる。
- 5) 論旨を明確にしたレポートが書けるようになる。

学生生活で必要な基本的技能を以上に絞り込み、学習者の人数、日本語力を考慮し学習目標に軽重をつけながら運用した。

## 2.3 各学期の授業内容と学習成果および学生の行動観察

### <2004年2学期 授業内容>

- 1) 俳句会
- 2) 発表：紹介(1人1回)
- 3) 質疑応答および意見交換
- 4) 発表者へのコメントを書く
- 5) レポート提出

学習者同士がお互いを知り合うため、俳句会を始めに催した。皆初心者であるため、優劣を競うというより、それぞれの作品についての感想を述べ合うというものであった。始

めは、何をどうしてよいかわからなかった学習者も自分の句が取られると嬉しいもので、心を開いていった。俳句会では、学習者の印象通りの句が披露されたり、作品と作者の意外な取り合わせだったりもする。学習者がお互いを知ろうとする好奇心を喚起するための活動として初めの2週に渡り実施した。

その後、一回の授業で2名ずつ発表、質疑応答、意見交換、発表者へのコメントを書く、という活動を行った。学習者のコメントを教師が一覧にまとめ翌週授業の始めにそれを基にフィードバックを行った。その後、各自の発表内容をレポート形式にまとめた最終レポートを提出する。発表のタイトルは以下の通りである。

「アメリカの国立公園の紹介」(帰国生1年)

「平成15年度入学帰国生の実態 アンケート調査に基づいて」(帰国生2年)

「ドイツのクリスマスの紹介」(帰国生1年)

「ネパールについて」(帰国生1年)

「恐竜とその謎」(中国人学部学生)

「地震対策」(中国人短期留学生)

「湖南大学と筑波大学での履修方法の違い」(中国人短期留学生)

「中国料理の紹介」(中国人短期留学生)

「韓国大統領弾劾発議事件 今日の韓国政治と国民意識」(韓国人短期留学生)

「マクドナルド化される世界グローバリゼーションの意味とその具体例」(韓国人短期留学生)

「韓国人における日本語学習時の誤用傾向 母語の干渉による受け身・使役での誤用傾向を中心として」(韓国人教員研修生)

この学期は、帰国生とそれ以外の学習者との隔たりが特に大きかった。特に韓国人の学習者は、短期留学生と教員研修生からなり、年齢的にも、知的成熟度からも秋に入学したばかりの帰国1年生とは大きな差があった。それは発表内容に如実に現れ、全般的に帰国生の発表の未熟さが目立った。このことは帰国1年生の動機付けを挫いただけでなく、短期留学生らの日本人学生との混合授業に対する期待をも裏切ったようであった。授業での学習目標とは別に、学習者の個人目標を設定するよう学習者にうながしたところ、短期留学生の1人が「いろいろな考え方を他の学生から学ぶ」という目標を設定した。日本人学生との合同授業で多くを学べると思っていた留学生が肩透かしを食った気分になったようであった。

帰国1年生は、既にそれぞれの国で大学生活を何年か送り、大学での勉強のノウハウを心得ている学習者と一緒に大学での初めての発表をし、その成果によって成績が決定されるという理不尽さを感じていたようだった。人数の上でも帰国生4名、留学生7名と発言力が小さかったようだ。

<2004年3学期 授業内容>

- 1) 討論会
- 2) 討論テーマに関して情報収集、
- 3) 要旨をまとめ自分の感想、意見を書く
- 4) 討論会で自分の考えを述べる
- 5) 討論会の評価を書く
- 6) レポート提出
- 7) 毎週2つ四字熟語を覚え、四字熟語を創作する

帰国生10名(1年9名、2年1名)と留学生5名という組み合わせで計15名の登録者がいた。15名では発表活動は時間的に余裕がなくなると判断し、発表ではなく、討論会で授業を進めていくことにした。

毎授業の始めの10分ほどを四文字熟語を覚えるという活動に当てた。授業初日に、それぞれの日本語に関する問題点、演習2の授業で何を学びたいと考えているのかについて話し合った。帰国生と留学生双方が漢字に弱いと感じていた。この共通事項を毎週四文字熟語を覚えていくという活動にし、弱点克服の小さな一歩を踏み出すことを皆で約束した。毎週当番学習者を2名決め、1人は四文字熟語を2つ調べてきて、その意味を説明し、使い方を教える。もう1人は、漢字を自由に組み合わせ創作熟語なるものを1つ考えてきて披露し、他の学習者はその意味を推察するという活動を行った。学習者間のコミュニケーションを活発にするという狙いも含むものである。そして、以下のような流れで討論会を行った。

- 1) 次週のテーマを決める
- 2) そのテーマに沿って各自情報収集。
- 3) A4一枚分のレポートを翌週提出。A4用紙の3分の1から半分に集めた情報の要約、残りに自分の考えたこと、意見を書き翌週提出
- 4) 小グループに別れ、各自の書いたレポートに基づいて意見交換
- 5) 全体で議長、書記を決めて討論会  
留学生の語彙不足対策として、書記は発言者のキーワードを必要に応じ振り仮名をつけて板書していく。
- 6) 第1回目の討論会の後に、その日の討論会についての評価をレポート課題として翌週提出させた。学習者の積極的参加を促すためのレポートで、発言しやすく、より多くの意見がきける活発な討論会の進め方を提案するのが課題である。
- 7) 翌週のテーマを決め、3) のレポートを書く。

討論会のテーマは以下のようなものであった。

第1回目 スマトラ沖津波

第2回目 同性結婚

第3回目 性犯罪者の情報公開の是非について(教師からも新聞記事情報提供)

第4回目 学校が荒れている現状について

1週間前に討論会のテーマを決め、それに関する情報収集し、要約と自分の意見を書いてくるという課題は留学生が討論会に参加するのに役に立った。情報収集することでそのテーマに関する語彙が覚えられ、自分の意見を文章化することで討論会への準備ができていと感じることができ、積極的に発言していた。帰国生にとってもあらかじめ文章に書くことで、ともすれば仲間内のくだけた日本語で話してしまうところを制御できた。

この学期の学習者の構成は、帰国生10名(1年9名、2年1名)、留学生5名(短期留学生4名、学部生1名)であった。2学期の組み合わせでは萎縮してしまった感のある帰国生であったが、3学期は人数的にも圧倒的多数で、さらにこの学期は活発な学習者が集まったようで活気があった。また留学生は5名と少数派でありながらも、帰国生に負けずに発言し、積極的な参加姿勢であった。前学期と比べると学生間のコミュニケーションが活発で、互いに学びあう環境ができあがっていった。第2回目の討論テーマ「同性結婚」では、韓国人学習者がレポートで誤って「同姓」と変換していた。韓国では「同姓結婚」が禁じられていたということを知らない学習者がいて、韓国人学習者に韓国での「同姓結婚」が禁じられていた理由を翌週時間を設けて説明してもらおうということもあった。この期は相互学習が効果的に働いたと言える。この学期で相互学習環境がうまく形成された要因がいくつか考えられる。

- 1) 帰国生と留学生との人数構成(帰国生10名 留学生5名)
- 2) 年齢差の縮小(帰国生9名が1年生)
- 3) 帰国生が秋の入学から3ヶ月経ち大学での授業に慣れてきた
- 4) 帰国生、留学生とも活発な、口頭表現能力に秀でた学習者が受講した
- 5) 全体に動気付けの高い学習者が受講した。

#### <2005年1学期 授業内容>

- 1) 発表: 紹介と意見
- 2) 自分の発表に関する小テストを作成、実施、採点、返却
- 3) 発表者と発表に対する評価を書く
- 4) レポート提出

2004年度2学期とほぼ同様の授業活動であるが、異なる点が2つある。その1つは、発表者は自分の発表の要点に関する小テストを1枚作成する。質疑応答、意見交換の後、聞いていた学習者はテストに答え、発表者は採点をし、翌週返却する。発表者自身が何を伝

えたいのかを意識する目的と、聞いている学習者の発表への注意を促すためのものである。テストと言ってもごく簡単なものであるが、教師作成のものではなく、クラスメイトが作ったテストで採点も発表者がするという事で学習者の取り組みはよかった。もう1つの異なる点は、2004年2学期は発表にたいするコメントを書き、それを教師がまとめ、翌週フィードバックを行ったが、この学期では学習者にレポートの形で提出させた。分かりやすさの工夫、発表の構成など分析的に批評する目を養い、よい発表の条件を客観的に把握してもらおうというものであった。全ての発表者についてレポートを書くのではなく、学習者が2名を選び、発表の長所短所を論じた。発表のタイトルは以下の通りである。

- 「福知山線脱線事故について」(帰国生2年)
- 「相撲」(帰国生2年 上記学生の2回目の発表)
- 「遺伝子組み換え食品」(帰国生1年)
- 「睡眠時無呼吸症候群」(中国人学部学生1年)
- 「靖国神社参拝」(中国人学部学生1年)
- 「つくばエクスプレス」(中国人学部学生1年)
- 「地震について」(中国人学部学生1年)
- 「血液型について」(中国人学部学生1年)
- 「歳差運動」(韓国人学部学生1年)
- 「ハンガルの歴史」(韓国人学部学生1年)
- 「胚芽幹細胞」(韓国人学部学生1年)
- 「環境にやさしい自動車」(マレーシア人学部学生1年)

この学期に集まった外国人学習者は日本語の口頭表現能力がやや低く、声も小さく内向的なタイプの者が多かった。しかし、発表のタイトルからも分るようかなり難しい話題に挑戦した。学習者の専門分野の内容もあったが、小テストを作成し、採点するという課題が発表者に課せられていることもあってか、日本語での口頭表現力が弱い分、言葉だけに頼らず、パワーポイントや板書、ハンドアウト、図、絵などを駆使して、分かりやすいよい発表をした。この学期で新たに採用した課題、「2人分の発表の評価レポートを書く」、「発表者がテストを作成、採点する」という2つの試みは、内省的でなかなか自分の意見を言えないこの学期の学習者には適当であったかと思われる。書くことで自分の思い、考えを表出する場を持つことができたようだ。

相互学習の効果という点においては、予想していた程成果が上がらなかった。韓国人留学生3名、中国人男子留学生2名の結びつきが強く、1人1人がばらばらになって他の学習者との話し合いに積極的に参加したり、共同作業を行うという姿勢に欠けていた。帰国生2年の男子学習者は1回目の授業からリーダーシップを発揮するべく他の学習者に話し

掛けたり、発言を促したり努力していたがややシャイなタイプの多い留学生はなかなか打ち解けない様子であった。この男子学生の努力が空回りしているような印象があった。発表活動に入り、小テストを実施し、採点、返却という一連の過程を経て学習者同士段々と馴染んできた、という印象を持った。

### 3. まとめ

学習者が学習者から学ぶ、ということと活発な学習者間のコミュニケーションとは必ずしも一致しないであろう。2005年1学期のように一見、学習者同士のコミュニケーションが2004年度3学期と比べると不活発に見えても学習者同士で大いに何かを学んだ、外からは見えないが、学習者の内面で学びが起きている可能性もある。2005年1学期のような内向的な集団での相互学習はなかなか見えにくいものがある。

それでも学びあう最適の環境を作り出す努力をするのが教師の勤めである。

以上3学期間の観察から、筆者が学んだことは

- 1) ピアラーニングのピア、同世代で学習目標が共有できることが大事である。
- 2) 学習目標をクラスで確認し、学習者間で共有する。少なくともこの学期は共に学んでいく仲間という連帯感を持たせる工夫をする。
- 3) 俳句会や四文字熟語を一緒に覚えたり、創作四文字熟語を楽しんだり、授業の目的からは逸れて足りない時間を無駄に使っているかに見える活動が学習者間のコミュニケーションを活発にし、連帯感を強める働きをするのではないか。
- 4) 外交的、口頭表現能力に優れた学習者の集団では自由に活動をさせても学習者同士のコミュニケーションがとれやすいが、内向的学習者の多い集団では、口頭での意見発表だけでなく、書くことで意思表示ができるような活動を加えるとよさそうだ。
- 5) 学習者が学習者から学ぶといっても、意識せずに学んでいる時もあるし、意識して積極的に学ぶこともある。果たしてこれらの学習効果をどうやって測定するのか。

以上、次の授業への課題とし、具体例を収集し報告する予定である。

### 参考文献

- 佐藤喜久雄監修(1994)『国際化・情報化社会へ向けての表現技術』創訳社  
高橋純子(1998)「あらたまった場での口頭表現能力養成を目的とする教室活動」『日本語教育方法研究会誌』Vol.5 No.1  
高橋純子(2004)「授業報告 演習2」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』19:211-214